

次なる 50 年

うみのみやこ
横浜は海都へ

「都心臨海部・インナーハーバー整備構想」提言書



横浜市インナーハーバー検討委員会

平成 22 年 3 月

■ 本提言について

横浜市インナーハーバー検討委員会では、横浜市による「都心臨海部・インナーハーバー整備構想（骨子案）」を踏まえ、構想の内容を深め、横浜市民をあげてその実現へ向けて動き出していくことを目指して、本提言書を取りまとめました。

提言のとりまとめにあたっては、横浜市から研究依頼を受けた大学連携組織「大学まちづくりコンソーシアム横浜」が、市民や当地区の関係者、各分野の専門家の意見を聞きながらまとめた「海都横浜構想2059（案）」の研究成果を活かしました。

目次

はじめに	1
1. 構想の趣旨	2
1-1. 構想の位置づけ	
1-2. 構想の場所と範囲	
1-3. 構想の背景	
1-4. 横浜及びインナーハーバー地区に求められていること	
2. 基本理念	8
3. インナーハーバー地区の将来構想	9
3-1. 戦略	
3-2. リング状都市～内水面を囲む豊かな都心空間の創造	
3-3. 将来活動量の目標	
3-4. 新たな都市構造	
3-5. 環境	
3-6. 交通	
3-7. 交流	
3-8. 産業	
3-9. 生活	
4. 実現に向けた課題と今後の取組み	18
5. その他	20
5-1. 検討経過	
5-2. 検討体制	

はじめに

横浜は、1858年の「日米修好通商条約」による開港以来、国内外に開かれたわが国の産業・文化を牽引する国際港湾都市として発展してきました。その為、「開港の地」を含む港の景観と様々な港湾都市機能が複合する「都心臨海部・インナーハーバー」は、港町ヨコハマの象徴であり、原点でもあると言えます。

このような都心臨海部・インナーハーバーも、ただ自然にまかせて今の形になったわけではありません。過去のまちづくりを振り返ると、横浜市は、時代の流れに合わせて都市の機能、魅力などを高める為の様々な戦略を打ち出し、実施してきました。1965年には、六大事業として「都心部強化事業」、「金沢地先埋立事業」、「港北ニュータウン建設事業」、「高速道路網建設事業」、「高速鉄道建設事業」及び「ベイブリッジ建設事業」が立案され、これらの事業を骨格にして現在の都心臨海部・インナーハーバーが形成されて行ったのです。その時から半世紀近く経った現在、ようやく「まちづくり」の一つの容が現れ、実を結ぼうとしています。

「開港150周年」という大きな節目を経過した今日は、都心臨海部・インナーハーバーの次なる50年を考える絶好の機会だと言えます。これからの50年を見据えると、横浜は人口減少という大きな社会変化に直面することが推察されます。しかしながら、人口減という量的縮退はあっても、それが都市そのものの質的縮退となってはなりません。市民のみならず横浜を訪れる多くの人々が、幸福感と安心感を実感できるような質的な拡大が図られなければならないのです。

これまでの150年は我が国における「近代化」の歴史であり、そこには欧米先進諸国のモデルが存在しましたが、「ポスト近代化」の時期を迎えて、横浜は自らモデルとなり歩んで行かなければならない時代になったと言えます。そこで、「人類の共同財産」とされる海洋と陸域を合わせた統合沿岸域管理計画を基盤とする都市計画を策定し、これまでにない新しい横浜モデルとして世界に発信することが、沿岸大都市横浜の使命であると考えます。

内水面を抱える都心臨海部・インナーハーバーの地形は、他の都市には見られない大きな特徴であり、水辺を感じるその空間は、都心部・郊外部の区別無く、総ての横浜市民の共有財産であると言えます。従って、この構想は、都心臨海部・インナーハーバーだけで完結するものではなく、インナーハーバーを「横浜の泉」と捉え、湧き上がる清水のように「横浜の魅力」が我が国を含む人類社会全体へと遍く波及して行く様な「まちづくり」が求められています。

平成 22年 3月
横浜市インナーハーバー検討委員会
委員長 布施 勉